

# 山本憲と力鈞との交遊について

周 雲 喬

## はじめに

山本憲(1852～1928)は土佐の人、字は永弼、号は梅崖、梅清処主人、自由民権運動の活動家である。先祖は漢学に長けていたため、第六代土佐藩家老の深尾茂澄氏に招聘され、深尾家の名教館の教授となり、世襲をゆるされた。これを契機として代々の儒臣となったのである。このような家系に生まれて、山本も幼時より『春秋左氏伝』、『資治通鑑』および『唐宋八家文』などを学び、特に『春秋左氏伝』に精通した。これから山本の人格と学問の形成に漢学が大きな影響を与えたことは容易に想像されよう。1879年、彼は二十八才の時、大阪新報社に入社した<sup>1</sup>。翌年、「大阪新報」に山本憲が編集した「八重桜の緑」を掲載し、「大いに声価を博す」<sup>2</sup>と好評をもらった。その後「稚児新聞」、「北陸自由新聞」などに転々して新聞人の道に進もうとしていたが、やがて「稚児新聞」が政府の忌避に触れたため、停刊に追い込まれた。「北陸自由新聞」は資金繰りの問題で廃刊された。また家の事情から大阪で梅清處塾という私塾を開き<sup>3</sup>、生計を維持する事になった。1885年の大阪事件<sup>4</sup>に連座して捕らわれたが、服役中に中国の史書を始め多種の書物を繙読し、その成果を『新序』にまとめている。釈放後もアジア情勢、特に西洋列強による中国侵略を憂慮し、見解を『東亜事宜』<sup>5</sup>に著した。他に『論語私見』・『梅清處文存』・『梅清處詠史』<sup>6</sup>などがあるが、未刊行の著作も残されている。

日本社会に西洋文化が浸透しつつあった明治時代、山本は自身の儒学的素養を以て西洋文化に対峙した。とりわけアヘン戦争以来のヨーロッパ列強による中国での勢力拡張の情勢には強い危機感を持っていたのである。彼の清国旅行記『燕山楚水紀遊』には次のように記されている。

兩鄰隔海接境，誼如魯衛，而近年歐美人漸猖獗，欲逞虎狼之慾，為邦人者，宜遊彼土，廣交名士，提挈同仇，以講禦侮之方，固為應時之務。

『燕山楚水紀遊』(巻一)

日訳

© 高知大学人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース

<sup>1</sup> 『梅崖先生年譜』(発行兼印刷人 松村末吉 昭和六年拾月、非売品)の「明治十二年」に「大阪新報社二入ル」と記されている。

<sup>2</sup> 『梅崖先生年譜』(同前)の「明治十三年」を参照。

<sup>3</sup> 同前、「明治十六年」に「自是之後、予留在家、開塾課徒、以一家事情不得不然故也」と記されている。

<sup>4</sup> この年、民権運動の過激派による義勇兵を募って朝鮮の独立に手伝うことで、宗主国である清国との外交摩擦を拡大させ、戦争に発展すれば、その混乱に乗じ、政府を転覆しようとする。しかし、その計画が摘発され、首謀者大井憲太郎らが逮捕された。大阪で裁判が行われたので大阪事件と称される。

<sup>5</sup> 『東亜事宜』(発行人 大阪市西區南堀江通六丁目六十七番屋敷、福井清司、明治三十三年五月)

<sup>6</sup> 『梅清處詠史』(発行人 大阪市北區新川崎町御料地三号、渡邊得次郎、昭和四年八月発行、非売品)

(日中) 両国は海を隔てて境界を接し、友好関係は魯国と衛国のごとくである。しかし近年欧米人が跋扈し、虎狼のように掠奪の欲望を満たそうとしている。日本人たる者は中国現地を見て回り、名士と広くまじわり、協力して敵に立ち向かい、侵略を防ぐ方策を講じるべきであり、これはもとより時勢に応ずる急務なのだ。

このように彼は中国の志のある者とも交流し、西洋勢力の拡張に歯止めをかけたいと願っていた時に、たまたま清国の力鈞、字は軒舉なる人物に知遇を得るのである。山本はその年の秋に清国への旅行に出発するのだが、おそらくは力鈞との出会いが契機になったものだろう。彼は旅に出る前に「將遊清國 賦以舒懷」(将に清国に遊ばんとし、賦して以て懷を舒す) という詩を作った。「鄙夫久抱杞人憂、書劍還為禹域遊。才短慚無經國業、志高空講拯民謀。……」(鄙夫久しく杞人の憂を抱きければ、書劍もてまた禹域の遊を為す。才は短くして経国の業無きを恥ずるも、志は高ければいたづらに民を拯<sup>すく</sup>う謀を講ず。) という詩句は、まさにその時の心境の吐露である。

清国行の前、山本は力鈞に「送力軒舉序」を送り、また前述の『燕山楚水紀遊』では上海で力鈞と再会したことをも述べているが、両者の交友関係および力鈞の人物像について、これまでは不明な点が残されていた。小論は山本が保存している力鈞の書簡と『燕山楚水紀遊』及び『梅清處文存』などの資料と中国の文献とを対照し、二人の交遊の経緯、力鈞の人物と背景を考察する。そうして明治期の日中交流の一側面を明らかにするのが狙いである。

## 1、山本憲と力鈞との出会いについて

山本憲と力鈞の交遊は偶然の産物であった。「送力軒舉序」の中に二人の面会について次のように述べられている。

福州力君軒舉有憂國之志、將起銀元局來大阪購鑄錢機器。予始相見乎紫雲樓。一見如舊、握手歎<sup>7</sup>洽、日夕往來者半月。軒舉將如東京乃供張錢之。……

『梅清處文存・丁酉集』

日記

福州の力君軒舉は憂国の志があり、造幣局を起こそうとして大阪に造幣の機械を購入しに来了。私は始め紫雲樓で彼に会った。初対面なのに古くから旧友のように感じられ、手を握って気持ちに通じ合い、半月ほども頻繁に行き来をした。軒舉が東京に行こうとするので宴会を開き送りだすのである。

山本憲が力鈞に初めて出会った紫雲樓<sup>8</sup>は、大阪北区今橋の旅館である。かつて紫雲樓は各界名

<sup>7</sup> 「歎」は「款」の俗字である。

<sup>8</sup> 紫雲樓、大阪北区今橋四丁目にあった。創業は明治八年、昭和に入るまでずっと有名旅館だったが、太平洋戦争勃発後、強制疎開のため、廃業に追い込まれた。商社、薬品、織物関係の人も多く利用されて文化人にも人気があった。かつて夏目漱石、小山内薫、菊池寛、また横山大観など数々の名人は紫雲樓に泊まっていた。『漱石全集』第20巻(岩波書店1996年7月版、p341参照)に「午後公開(会)堂で演説、宿に郡長、市長、助役などくる。七時頃帰る。九時着、紫雲樓に入る」と記している。また「今橋の旅館『紫雲樓』のひとり娘として」(『船場大阪を語りつぐ』前川佳子構成・文、近江晴子監修、和泉書院、2016年8月、第一版)を参照。

士が利用し、新聞社の講演会なども行われる有名旅館だった。また自由党の板垣退助、片岡健吉など自由民権運動家たちが集う場所として知られており、山本がそこに出入りしたのも不思議ではない。商業地船場の便の良い立地であるため、商用の客も多数宿泊しており、力鈞もまたそうした客の一人であったわけである。山本が力鈞と出会った直接のきっかけは不明ながら、二人は初対面から意気投合し、力鈞が大阪から離れるまでの半月ほどの間に二人は頻繁に交際を重ねた。山本の記述によれば、二人の交遊の開始は明治三十年、すなわち1897年の夏のことであった。

では山本と力鈞の間でどのようなことが話題になったのか。「送力軒舉序」（以下「序」）の冒頭に「福州力君軒舉有憂國之志」とあることから、力鈞が山本に国運への憂慮を語ったのであろう。もちろんそれは当時の中国を巡る国際情勢と結びついていたに違いない。1894年日清戦争は「日清講和条約」の締結によって終結した。これによって清は朝鮮の宗主国としての権利を放棄して朝鮮の独立を認め、また遼東半島・台湾・澎湖諸島などを日本に割譲することになった。しかし、周知の通りそれはロシア・ドイツ・フランス三国の干渉を招くことになったのである。日本は三国の圧迫によって遼東半島を清に返還したが、清もまた日本に巨額の賠償金を支払った。その結果、清の国力はさらに衰えることになってしまった。このようなアジア情勢の中に居る二人が日本と清との関係を話題とするのは極めて自然だろう。それに関して「序」に次のような議論がある。

客歲適有睚眦之事，所謂兄弟鬩牆者，為嫌至小，不足以介意。當左提右挈，外禦侮焉。嗚呼，與子同仇者，豈非泰西人耶！夫亞細亞之地，漸為泰西人所蠶食。印度、緬甸、安南則亡，波斯、暹羅、朝鮮則弱。一念至此，誰不寒心！當是時，欲拯倒瀾而支傾厦，非待子之邦與吾之邦而何？二國之任不亦重耶！

「送力軒舉序」（同前）

#### 日記

昨年たまたま少しばかりの諍いが生じたが、兄弟のうちわもめは嫌悪となっても至って小さいもので、気にするほどのことではない。日中両国は互いに手を取り合って助け合い、外敵の侵略をふせぐべきなのである。ああ、我々共通の敵はヨーロッパ人ではないか。アジアの地はしだいにヨーロッパ人に蚕食され、インド・ミャンマー・ベトナムが滅ぼされ、イラン・タイ・朝鮮は国力が衰えた。これを思うと、誰か恐ろしく思わないものがあるだろうか。この時にあたって逆巻く波を阻み、崩れそうな大廈を支えようとするのは、君の国と我が国の他にはあるまい。両国の責任はまことに重大なのである。

この「序」によって、二人の間で日清両国の関係と国際情勢を語り合われたことは明らかである。力鈞の「憂国の志」とは、この時代背景下での両国関係と清国の将来に対しての志に他ならない。

おそらく山本は初対面の短い時間だけではまだ自分の本意を語り尽くせなかった。「序」に言うように二人が日夕往来したのは、両国関係やアジア情勢について繰り返して議論するためであったと思われる。

山本は清と日本との関係は同文同種の兄弟国のようなものであり、兄弟の喧嘩に喩えて日清戦争は気にするほどのことではないとする。我々共通の本当の敵は西洋人ではないかと訴え、両国は連携して共通の敵に抵抗するべきだと考えている。このように西洋勢力がアジアへ進出することに強く反対していることも力鈞の憂国の志と合致した点であろう。西洋諸国による中国侵略を、同じ儒教文明を共有する日本の国民として山本は許しがたく思っていたに違いないのである。ましてや西

洋列強が清で植民地を獲得したならば、そこを拠点として次は日本を狙うのは明らかだったのである。

山本に憂国の志を語った力鈞は、山本のことをどのように見ていたのだろうか。力鈞が友人に宛てた書簡<sup>9</sup>の一説に山本のことが見えている。

六月廿一日因買機械來日本。……此次適有文人山本梅崖游杭州。此人尚氣節，文才亦能自抒其所見。鈞游西京有贈序一篇，議論切實。曾在報館主筆多年，欲見中國達人。鈞於杭州寓公最欽佩者閣下，作此先容，想閣下憐才有素，當亦樂得一見，以覘此間文風。若山本氏者，在日本已如朝陽鳴鳳矣。

日記

六月二十一日に機械を買うために来日し、……この度、たまたま文人である山本梅崖という人が杭州に行くことになりました。この人は氣節を尊び、文才もまた自分の見解をのべることができます。鈞が西京に遊んだ時に賜った序が一篇あり、その議論は内容があって実際に適しています。彼はかつて新聞社で主筆として長年勤めていました。中国の事情通に会いたいというので、杭州に身を寄せる官僚の中では、私がもっとも敬服するのは閣下なので、あらかじめ紹介しておこうと思います。あなたはもとより才子を可愛がられますので、楽しんで会っていただくことでここ（日本）の文風が窺えると思います。山本氏のような人は日本では「朝日鳴鳳」というべき品格の高い人物でありましょう。

この文面を見れば、力鈞が山本を高く評価し、信頼していたことが伺える。気概品格を兼ね備えた人物で、漢文で自分の見識を表明できる文才の持ち主として見ていたのである。また山本の「送力軒舉序」にも言及し、「鈞が西京に遊んだ時に（山本憲から）賜った序が一篇あり、その議論は内容があって実際に適しています（原文「議論切実」）」と述べている。であってみれば、単に漢文の表現力を評価したのみならず、山本の日中関係に関する主張にも力鈞は共鳴し、信頼を寄せていたと考えられる。

## 2、力鈞について

『燕山楚水紀遊』（巻一）によれば、力鈞は次のような経歴をもつ人物だった。

會福州人先子軒舉，名鈞。嘗經鄉試補知縣。以事遊吾邦，約予遊蹤及福州，為西道主人。實明治丁酉歲九月也。

日記

福州の人である力君軒舉、名は鈞と会った。彼は嘗て地方試験を経て県知事の候補者となり、所用のため我が国にやってきて、私が福州に行くことがあれば、招待してくれると約束してくれていたのである。これは明治丁酉(1897)九月のことである。

造幣用機械の購入に来日した力鈞は単なる商人ではなく、郷試（官僚選抜の地方試験）合格者であった。そして県知事の候補者になったという。ただ清代では県知事の候補になったと言っても、

<sup>9</sup> 拙稿に挙げた力鈞の書簡は高知市立自由民権記念館所蔵の山本憲関係資料に収められている（下同）。なお、この書簡が山本憲は清国に旅行する際、力鈞から預かったものであり、年月日が記されていない。

大半の候補者は政府から実際の官職を貰えず、一種の名誉職として肩書きになる程度のものであった。おそらく力鈞が県知事候補になったというのも同様と思われる。

さらに彼の経歴を探るべく福建省の地方志<sup>10</sup>を調べてみると、福州府の『永福県志』の「光緒十五年己丑陳懋鼎榜」（試験官陳懋鼎による合格者名簿）に力鈞の名前を見出すことができる。「力鈞號軒舉，芹滌人，主事<sup>11</sup>。」（力鈞、号は軒舉、芹滌の人。主事）とあるので、彼は光緒十五年（1889）の郷試に合格し、故郷は福建省の永福県<sup>12</sup>の芹滌村だったことがわかる。「主事」とは清の中央政府のある部門の下級官僚を指すが、どの部門の主事であったかはここでは明らかでない（後述）。『永福県志』では力鈞の事跡についてこれ以上の詳細は明らかにならなかったが、意外なところに彼に関する記述を見いだした。『中国医学百科全书・医学史』<sup>13</sup>に力鈞についての記述があったのである。

力鈞（十九、二十世紀間），清末中医学家。字軒舉，号医院，永福（今福建永太）人。光緒年間舉人。早年先后从刘善曾、陈宗备、张熙皋、朱良仙等治儒习医。尝与福州名医郭永淦作《伤寒问答》，与郑省三论半夏，精研医药。自是亲友每以医事相嘱。……光緒17年（1891年），南渡新加坡，愈病颇众，乃辑《辛卯医案》。翌年辑《难经释补》。1894年返京应试，为诸显贵要人治病多效。归里奉养老母期间，福州鼠疫流行，力鈞以“大青汤”取效。旅游日本时，辑《日本医学调查记》。1901年撰《历代医籍存佚考》等书。1903年为商部主事，医名满京都，曾为慈禧太后及光緒帝治病。1910年历德、法、意、俄及瑞士、奥地利等国，尤注意访问医院医校，录以备考。子力嘉禾、力树蘊，均曾留学国外习医。力鈞戒子曰：“宜多临证。中医、西医学理，尔辈宜兼求并进，不可偏执。”且有将中医书译为西文之愿，未果而歿，年七十卒于京师。

#### 日記

力鈞（十九～二十世紀間の人）、清末の漢方医学者。字は軒舉、号は医院、永福県の人。光緒年間の舉人である。若くして劉善曾・陳宗備・張熙皋・朱良仙等に師事して儒学を治め、医学を学んだ。かつて福州の名医である郭永淦と『傷寒問答』を著して、鄭省三と漢方薬の半夏を論じ、医業を詳しく研究した。これより親戚友人たちは常々診療を依頼した。光緒（こうしよ）十七年（1891年）にシンガポールに渡って多くの治療実績を挙げ、『辛卯医案』にまとめた。翌年に『難経経釈補』を編纂した。1894年に北京へ帰って科挙を受験し、その際、貴人高官たちの診察治療にあたり、多くの患者を救った。故郷に戻り老母に奉養したとき、福州ではペストが流行したが、力鈞は漢方薬の「大青湯」で効果を挙げた。日本に旅行した時に『日本医学調査記』をまとめ、1901年には『歴代医籍存佚考』などを撰した。

1903年に商部主事になり、北京で名高い医者として、慈禧皇太后と光緒帝の治療に当たったこともあった。1910年にドイツ・フランス・イタリア・ロシアとスイス・オーストリア等を歴訪し、病院と医学校を訪れることを心がけ、参考のためその様子を記録した。息子の力嘉禾・力樹蘊は二人とも外国に留学して医学を勉強した。力鈞は息子たちに「なるべくたくさん臨床の証拠を得るべきである。おまえたちは漢方医学と西洋医学の両方を兼ねて習得し、研究を進めなさい。一方に偏ってはならない」と戒めた。

かつ漢方医学書を西洋語に翻訳しようという願いを持っていたが、それを果たせないままで亡くなった。七十歳で北京で死去した。

<sup>10</sup> 地方志とは特定の地域（旧行政地域の府・県など）ごとに分けてその地域の沿革・地理・風俗・人物・事件などを記した地方の史料を指す。

<sup>11</sup> 『中國地方志叢書・永泰縣志』（第七十七號、民國五十六年十二月 成文出版社、p135）

<sup>12</sup> 永福県は永泰県とも称した。

<sup>13</sup> 『中国医学百科全书・医学史』（上海科学技術出版社、1987年10月、p150）



ここに記された力鈞こそ、山本と交際した力鈞と同一人物であると断定できる。力鈞は科挙の郷試合格者であり、挙人という身分を有する医者だった。さらに彼は普通の開業医でなく、都で名声を得て、宮廷の御用医者として慈禧皇太后と徳宗皇帝(光緒帝)の治療にも当たったことが判明した。

前述の『永福県志』には力鈞の官職は「主事」と記されていた。『百科全書』によれば彼は日本から帰国してから1903年に商部の主事になったのである。しかし、『百科全書』の記述にはいくつかの問題点がある。まず力鈞の生没年について記されていないこと、また他の力鈞に関する資料を調べたところ、さらに不備と誤りがあると判明した。では他の資料に拠り、力鈞の事跡について考察していこう。

力鈞の医者としての代表的著作は『崇陵病案』である。この書物は清の光緒帝と慈禧皇太后を診察した後にまとめられた治療の記録である<sup>14</sup>。漢方医学だけではなく、医学史においても、非常に重要な資料と言える。それ故、この書物は力鈞の息子である力嘉禾の「崇陵病案序」及び陳可冀(中国科学院)による「影印『崇陵病案』序」などを付して1998年7月に刊行されている。

まず、陳可冀「影印『崇陵病案』序」は、力鈞の生没年を1855年出生、1925年死去と記しているが、1855年出生説に疑問を投げかけた議論もある(後述)。力鈞の号についても『百科全書』の「医阮」に対して陳可冀の「序」では「医隱」としている。もともと「医阮」では意味をなさない。また力鈞から山本宛の書簡に、当時の中国は「市隱更非其地」(市井に隱居するにはさらにその地にあらず)という文があることから、かつて力鈞が市井に隱棲しようという思いがあったことが窺える。したがって力鈞の号は「医隱」だったと見るほうが穏当だろう。

力嘉禾の「崇陵病案序」は力鈞の生年についてとくに触れていないが、序は力鈞の生誕の日を話題として取り上げている。「先嚴與藥王<sup>15</sup>同生日。其學醫也，蓋性之所近，非先知有藥王，而始治醫學，乃學成而始知有藥王。」(亡くなった父は藥王と同じ日に生まれた。彼が医学を学んだのは性格に合いそうだからであり、先に藥王がいることを知っていて、医学を治めたわけではない。学び終えた後に、はじめて藥王のことを知ようになった)とある。藥王とは中国古代の名医扁鵲のことである(他説もある<sup>16</sup>)。民間伝説によると旧暦の四月二十八日は藥王の誕生日とされ、その日がくると医者はお香を焚いて藥王を祭るという風習があった。清・顧禄の『清嘉録・四月』に「二十八日，藥王生日，医士備分焼香。」(二十八日は藥王の誕生日であり、医者はお香を備えて焚く)と記されていることから、藥王を祭る風習が清の時代でも残っていたことが分かる。したがって力鈞は旧暦の四月二十八日に生まれたわけである。しかし、その生年について最近の論文「晚清医家力鈞事迹及著作考訂」(王宗欣・裘俊、『中華医学会医史分会第十三届一次学术年会論文集』2011年)では、力鈞の生年に関する次のような証拠を示している。

福建文史館連天雄先生收藏了一份力鈞乡试履历表<sup>17</sup>，据履历记载：“力鈞，字軒舉，行一。清咸丰丙辰四月二十八日吉時生。福州府永福縣學廩生，民籍。”

<sup>14</sup> 力嘉禾の「崇陵病案序」に「丙午、兩宮欠安、由軍機推薦進宮請脈、輯『崇陵病案』」(『崇陵病案』力鈞著、学苑出版社、1998年7月)という。「丙午」は、すなわち1906年である。「兩宮」とは慈禧皇太后と光緒帝のことを指す。ちなみに書名『崇陵病案』の由来は光緒帝を埋葬した御陵を「崇陵」と称することによる。

<sup>15</sup> 清の高士奇『扈从西巡日录』に「药王庙，专祀扁鵲。四月二十八日，贺药王生日」という。『清一統志』に「药王庙在任丘县鄭州城东北，祀扁鵲」という。

<sup>16</sup> 唐の孫思邈が藥王であるという説もある。

<sup>17</sup> 『清代御医力鈞文集』(陳可冀編、国家圖書出版社、2016年8月第1刷)の中に同じの履歴表をカラー版の写真として添えている。

## 日記

福建文史館の連天雄氏は力鈞の「郷試履歴表」を所蔵している。履歴表の記載によれば「力鈞、字は軒挙、長男であり、清の咸豊の丙辰年四月二十八日の吉時に生まれ、福州府の永福県学の廩生<sup>18</sup>であり、民籍である」という。

この履歴の記載によると、力鈞は清の咸豊帝の丙辰(1856)の年に生まれたことになる。また履歴表の中に「行一」と記されている。「行一」とは兄弟の中に一番目、即ち長男という意味がする。これも清の郷試履歴に必ず記入する項目であった。

この履歴表は出生年を記録した文献としては確かなものだから、私が思うに1855年出生説はおそらく卒年から計算した出生年の誤解である。ではなぜ力鈞の生年は1855年と誤解されたのか。

中国では死亡時の年齢を数え年で記録する風習がある。恐らく力鈞も数え年で記録されたのではないだろうか。実際に力鈞が亡くなった1925年では、力鈞は七十歳未満だったけれども、数え年で七十歳で逝去と記されたことが十分考えられる。しかし、時代の流れと共に現代人はこの風習を忘れてしまったのか、『福建通志』に力鈞は1925年に逝去し、七十歳だったという記載があることから遡って彼の生年を推算すれば、1855年になってしまうのである。ちなみに新しく刊行された『崇陵病案』(【清】力鈞著、王宗欣・雷湘平点校、学苑出版社、2015年7月第1刷)では力鈞の生年は1856年に訂正されている。

また『百科全書』には、力鈞は「日本に旅行した時に『日本医学調査記』をまとめた」との記述があるが、何年のことだったかは記されていない。山本の『序』によれば、その来日は1897年(丁酉)とされており、また力嘉禾の「崇陵病案序」にも「丁酉遊日本、考察其維新後医学之發明。廣購医書、薬具、薬品。」(丁酉の年日本に行き、その維新後の医学の発展を考察し、広く医学書・医療器具・薬品を購入)と述べられていることから、1897年であったことは間違いないであろう。

そして来日の目的は造幣用機械を買うためだけでなく、この来日の機会に乗じて、力鈞は明治維新後の日本医学の発展について考察すると共に医学書と医療器具及び薬品をも購入した事実が明らかになった。帰国後、その調査の成果として『日本医学調査記』をまとめたのであろう。

その後の力鈞の活動について力嘉禾の「崇陵病案序」によれば、甲辰(1904)に上京して王侯大臣に診療を行い、その結果を『王公大臣治驗録』にまとめている。続いて丙午(1906)に軍機大臣の推薦により、宮廷に招聘され、慈禧皇太后と光緒皇帝に診療を行った。

慈禧皇太后への診療について『崇陵病案』「附録二・記事」<sup>19</sup>に次のようなエピソードが記されている。力鈞は慈禧皇太后に診療を行って、胃の消化機能が衰えていると診断し、流動食であれば治ると考え、慈禧皇太后に一日三回鶏汁を飲むことを進めた。その効果はいかほどだったか。慈禧皇太后が快癒の喜びを語っている。

昨日不服薬，每一点鐘飲鶏湯一次。日夜十二次，不渴亦不餓。臨睡飲葡萄酒一杯，一覺天已大亮，睡臥極安適，痰嗽亦癒，此數年來所未有者。……鶏湯如此有益，勝人參燕菜多矣。

## 日記

昨日薬を飲まず、一点鐘(二時間)毎に一回の鶏汁を飲む。日夜十二回で、咽喉が渴かず、また

<sup>18</sup> 「廩生」とも書く。清の科举制度の一つ。州・県の地方試験を合格し、成績優秀の人は廩生(官費生)になり、地方政府から俸禄を支給する。

<sup>19</sup> 『崇陵病案・附録二』【清】力鈞著、王宗欣・雷湘平点校、学苑出版社、2015年7月第1刷。

お腹もすかない。寝る直前、ワイン一杯を飲み、一眠りしたら、もう夜明けだった。寝付きもよく快眠で痰咳も治った。このようなことは数年来なかったことである。……鶏汁はこれほど効果があるとは、朝鮮人参や燕菜より、ずっと優れものだ。

ところが、力鈞はまさにこの治療の成功によって宦官の妬みを買うことになってしまったのである。記事は次のように続く。「総管崔玉桂盛怒前来, 高坐卓上, 坐盤腿噴目, 高呼曰: “老仏爺聞力鈞言, 一天不吃飯, 只飲鷄湯。似此辦法, 則農家只須喂鷄, 不必種稻, 真異聞也。万一胃氣弄壞, 此錯誰担?”」(総管<sup>20</sup>の崔玉桂が激怒してやってきた。テーブルの上に胡坐をかいて目をむき、「老仏爺(慈禧皇太后の通り名)が力鈞の話聞き入れて一日食事もされず、鶏汁しか飲まなかった。このようなやり方では、農家はただ鶏を飼っていればよく、米は作る必要がない。まったくおかしい話だ。万が一胃袋の調子が悪くなれば、これは誰の責任だ」と怒鳴った)。その時に「時徐中堂世昌乃正色言曰: “鶏汁補益, 勝五穀多矣! 外国医院, 病人多飲鷄汁, 牛乳。” 崔玉桂乃悻悻而退。」(徐中堂<sup>21</sup>世昌は厳しい顔をして、「鶏汁が体の不足を満たすのは五穀より、はるかによいのだ。外国の病院では患者は大体鶏汁やミルクを飲むのだぞ」と叱ったので、崔玉桂は不快な表情で引き下がった)と記されている。この記事は医者としての手腕が優れていたために、却って宮廷内の力関係や権力闘争に巻き込まれることになったことを暗示しているのではあるまいか。宮廷の御用医師にまで登りつめたにも拘わらず、彼は後に医療事業から離れている(後述)。その経緯は不明だけれども、宮中の権力闘争はおそらく彼の経歴にも影響したのである。

### 3、山本憲との交遊関係について

山本は大阪で力鈞と半月ほど往来し、清国旅行に出る直前の九月に別れた。その際、前述のように力鈞は彼を福州へ行くように誘ったのだが、山本は力鈞の誘いに応じなかった。それはなぜだろうか? 『燕山楚水紀遊』(巻二)にその理由が記されている。

偶聞力子(軒舉)従本邦歸滬, 候船航福州。乃往訪之福來棧。力子曰: “大阪分袂, 去之東京, 探磐城群馬等諸勝。歸大阪, 留住僅二日, 與諸君子, 不能再聚敘別, 至今歉然。” 因問予遊狀。予語以探長城西山諸勝, 遂與力子相携歸寓, 小酌。力子苦勸予偕遊福州。予將探蘇杭長江諸勝, 故未能果。

日記

たまたま力君が日本から上海に帰り、福州への船を待っていた。それで福来という宿を訪ねていった。力鈞は「大阪で別れて東京へ行き、磐城、群馬などのいくつかの名勝を訪問した。大阪に帰ってたった二日泊まっただけなので再び諸君と集まって別れ話をすることもできなかった。そのため、いまでも申し訳なく思っている」と語った。(力鈞が)私(山本)の旅行のことを聞いてくれたので、私はすでに万里の長城と西山などの名勝を探訪したことを語り、力鈞と一緒に宿に帰って少々飲んだ。力鈞は心をつくして福州へ私と共にいきたいと懇願してくれたが、私は蘇州・杭州・長江などの名勝を見に行くことにしていたので、できなかった。

<sup>20</sup> 宦官の総監督。

<sup>21</sup> 清の大学士、また軍機大臣に「中堂」と称する。



即ち、すでに蘇州・杭州行の予定をたてていた山本は、力鈞の招待を受けられなかったのだが、力鈞の山本に対する懇請のほどが偲ばれよう。そのことは他の記述からも裏付けられる。二十五日に力鈞は山本を招待し、力鈞は日暮までに山本を宿舍まで送っているが、その時「力子曰：“君今日行，我明日歸，相隔又數千里，不知夢魂得相依否？”」（力鈞曰く、「君は今日出発し、私は明日（故郷に）帰る。互いに数千里を隔てることになるが、互いに忘れないでいたい）」と語っている。これに対して山本は「予曰：“男子之交，不以形而以神。若信書往來無虛日，雖隔千里，猶相見之日。”」（私は曰く、「男同士が交わることは形に拘らず、心が通じあえばよいのです。もし頻繁に手紙のやりとりをするなら、千里を隔てていても、相見えているときと変わりませんよ）」と答えたのである。ここで山本の使った「不以形而以神」という句は、竹林の七賢として有名な嵇康と阮籍及び山濤の三人の交友関係を踏まえていよう<sup>22</sup>。ここにも彼らの男同士としての友情を見ることができる。

その後、二人が再会するチャンスはなかったが、上海で別れて四年後の1901年に力鈞は山本へ手紙を送った。日本から帰国後の状況に言及した書簡の一部を見てみよう。

貴國歸來，再遭親喪，心膽崩裂。國事癘潰，一至此極，天乎人乎？去復何辭！輔車唇齒之誼，有  
 心人同此嗟歎。鈞因銀元局歸官，與陳玉蒼侍御壁<sup>23</sup>合辦興化府<sup>24</sup>屬鹽務，出捐官胥，入儕販豎。昔  
 也文苑，今也貨殖。商戰已非其時，市隱更非其地。葬親嫁妹，人事粗畢，會當移家海外，與世長辭。

#### 日記

貴国から帰ってきてから親がなくなり、心胆が潰れるほど悲しかったです。国事も混乱の極みに至っています。これは天の意思でありましょうか。はた人間の所為でありましょうか。私はこのような国から脱出することに何のためらいもありません。両国は輔車唇齒のようにもちつまたれつという関係でしたのに、（今は敵対関係になってしまい）心ある人はこの嘆きをともにしています。鈞は造幣局が官庁所管になったため、陳玉蒼侍御壁と共同で興化府の食塩売買をしています。出入に役人に会釈し、小商人の仲間に入ってしまいました。昔は文学の仲間と詩を吟じたのに、今は商売を営んでいます。もう商売の機運も消えてしまい、市井に隠居しようとしても、そのようなところはどこにもありません。親の葬儀を終え、妹も嫁がせたので、これで概ね家のことが片付きました。そろそろ家を海外に移し、俗世間からおさらばすべきでしょう。

この手紙を出した年月は1901年の6月である。つまり力鈞は日本から帰国した後、親の葬儀を出して心身ともに衰弱した上、国家も崩壊の崖っぷちに立たされたことを見て更に国の運命を憂えたのである。その時清では世界中を震撼させた義和団の動乱が巻き起こっていた。「扶清滅洋」（清朝を助けて西洋を滅ぼす）のスローガンを掲げ、暴力で西洋勢力を一掃しようとするものである。義和団は外交官や宣教師を殺害する事件を起こして北京の公使館と教会を包囲した。慈禧皇太后は義和団の反乱を利用して西洋勢力を排除しようと考え、外国に宣戦をしたのである。清朝と義和団との連携に対抗するため、英・仏・独・日など八カ国は連合軍を結成し、日本軍も連合軍の主力として参戦した。連合軍はほどなく北京を占領し、慈禧皇太后は光緒帝をつれて西安まで逃げおちざるを得なかった。力鈞はこの内憂外患交々至るという状況に絶望し、かつ日本と清とは本来輔車唇齒のごとく互いに依存し協力しあう関係であったのに、敵対関係に変わってしまったと残念がっている。

<sup>22</sup> 『晋書・嵇康伝』（卷四十九）：「所與神交者，惟陳留阮籍，河内山濤」という。

<sup>23</sup> 陳璧（1852～1928）、字は玉蒼、福建省閩縣の人、光緒三年の進士。かつて監察御史、戸部侍郎等に任じた。

<sup>24</sup> 「興化府」は福建省の管轄下の「府」という行政地域であり、莆田市と仙遊県という二つの県がある。

文中の「有心人」というのは、一般的に両国関係の重要性を理解する人を指すばかりでなく、ここでは山本も同じ気持ちであろうという思いが込められているだろう。

次にこの手紙からわかるのは力鈞の人生の転変である。力鈞は医者として名を上げながら、商売に手を染めて生計を維持するようになっていた。ただそれは彼が願ってのことではなかったようで、「出入に役人に会釈する小商人の仲間になった」というように自嘲せざるをえなかったのである。それなのに国の現状は商売の機運もなく、市井に隠居しようとしても適切な場所もない。「家を海外に移し、世と長辞すべし」などの文言は、この時期の彼の心中を語って余りあろう。

そして「昔や文苑、今や貨殖」という二つの文が対照的に並べられていることに注目しておきたい。儒学的立場からいえば、「文苑」は知識人として当然の名誉ある事業であるのに対し、「貨殖」は軽侮されるべき事業だった。伝統中国ではそれが一般的な社会の認識だったのである。しかし、清朝社会も時代とともにますます近代的経済社会に転換することは避けがたい趨勢であってみれば、一族の生活を支えるため、仕官を断念して「貨殖」即ち商業へ人生の方向を変更することも珍しくなかった。力鈞が商売の世界に転じたのも先ずはそうした事情によるだろう。社会の経済発展によって通貨の役割も大きくなっていった。当時の中国では銀本位制をとっており、清の政府は民間の銀貨の鑄造をみとめていた。力鈞はそのチャンスを掴んで造幣局を作ったのである。

ところで、郷試合格の力鈞はどのような文学的生活を送っていたのか。これについて「影印『崇陵病案』序」は、「与福建近代著名人物陳宝琛、陳衍過從甚多，有詩詞吟和。」（力鈞は福建省の近代の著名人陳宝琛と陳衍との付き合いが多く、詩詞の唱和をも行った）と述べている。陳宝琛（1848～1935）は字伯潜，号弢庵。福建省の閩県の人。清の最後の皇帝である宣統帝の学問の師として清朝滅亡後も、もとの元皇帝溥儀（宣統帝）に仕えた学者である。すこし時代を遡って同治帝の時、陳宝琛は内閣学士に礼部侍郎を兼ねたが、ある因縁によって罪に問われ、官位を貶されたため、福建省の故郷に帰った。力鈞と陳宝琛が詩歌の贈答したのは恐らくその時期であろう。そして陳衍（1856～1937）は近代の文学者であり、字は叔伊、号は石遺老人である。福建の侯官県の人。かつて京師大学堂の教習であった<sup>25</sup>。侯官県は閩県の隣にあり、いずれも福州府が管轄するということから陳衍と陳宝琛は同郷である。陳衍は経学・史学・訓古学に精通し、詩歌にも優れた。当時の詩壇は、影響力の大きな人物であった。彼は著作も豊富であり、『石遺室文集』と『石遺室詩集』などが残されている。

力鈞が彼らと交遊したのは、福州一帯で漢方医として診療を行ったことによって二人と縁を生じたのではないかと考えられる。力鈞はそのような文壇の著名人二人と詩歌の贈答を行っていたのである。「昔也文苑」という句にはその時期の詩の創作活動が念頭にあったと考えられる。また詩詞の創作以外にも力鈞には『詩経藥物考』と『爾雅藥物考』の著作がある<sup>26</sup>。このような学者としての研究活動ももちろん「文苑」活動の一環であり、そのことに力鈞も自信と誇りをもっていたはずである。

前出の書簡には、来日した彼が造幣用機械以外にも、日本で刊行された中国の古典書籍も熱心に多く買い集めたことも記されているが、これも彼の教養的背景と自意識をから理解すべきことである。

<sup>25</sup> 「侯官陳石遺先生年譜」（『晚清名儒年譜』本社影印室編、北京図書館出版社、2006年）を参照。

<sup>26</sup> 力嘉禾の「崇陵病案序」を参照。

鈞此行得多交此間豪俊、得古本書滿篋。有影印宋本『論語集解』、校之各本微有異同。『玉篇』殘本、海東厘存。然『經籍訪古志』<sup>27</sup>言有二冊、俱存。叢書所刊、已多「糸」部下半及卷尾一冊。此明治八年黎欽使<sup>28</sup>刻者。十六年日本續刻高山寺本「糸」部上半、与黎刻下半緊接。黎刻「糸」部「經」字起、續刻「糸」部「縝」字止。……去年又有一刻、自「山」部至卷末。全冊三刻合成、已得全書四分之一。以視廣益會本<sup>29</sup>、有霄壤之別。

#### 日記

鈞はこの度の旅でここの俊豪と多く交わることができました。また得た古本が箱に一杯になりました。影印宋本『論語集解』があり、各刊本を比べ合わせてみると少し異同があります。『玉篇』の残本が海東(日本)にだけ存しているようです。『經籍訪古志』によれば二冊あり、ともに現存しています。(古逸)叢書の刊本は従来のもより、「糸」部の下半部と巻尾の一冊が多くなる。これが明治八年に黎欽使が復刻したものである。十六年に日本は続いて高山寺の刊本の「糸」部上半を復刻し、黎刻本の下半とぴったりつながりました。黎刻本の「糸」部は「經」字から始まり、續刻本は「糸」部の「縝」字で終わっています。……昨年また一つ復刻されて、「山」部から巻末まであります。全巻は三冊をまとめてできたものなので、すでに全体の四分の一が手に入りました。これを広益会本に比べ合わせてみると、雲泥の差があります。

このように力鈞は医者でありながら、漢籍古版本の蒐集にも腐心した様子が見られる。前述のごとく力鈞の学問の根底には經学与訓古学があった。専門医学者でありながら、古典文学・經学・訓古学という分野でも該博な知識を有するものは清代でも稀な存在であったと思われる。こうして博学の力鈞と幼少のころから儒学教育を受けた山本憲とは共通の話題を多く持ち、終には莫逆の友になったのである。

## 結 び

明治維新後、日本は一躍東アジアの強国になった。これが中国の社会に大きな衝撃を与え、清の一部官僚と知識人は日清戦争の敗北の教訓を受け入れ、日本の明治維新の成功経験を学ぼうとした。具体的には日本の科学・軍事・農業・医学など各分野での発展に注目し、自ら日本の国状を考察し、知見を増やそうとして来日したのである。力鈞もまたその中の一人であったわけである。

山本憲と力鈞との交流は日清戦争が収束して間もない時期で、交戦国の民間人が心の隔たりを乗り越え、真摯な友情を築き上げた大変貴重な事例であると言えよう。山本は力鈞との交流を通じて、中国知識人への理解を深め、さらに中国の現状に対する関心をいっそう高め、自らの目で中国社会を確かめることが必要であると認識するに至った。それが1897年の清への旅行となったのである。

ただ、山本の力鈞についての文章からは彼の医師としての側面は見えなかったが、これは中国の文献から明らかになった。また日本から帰国した後の力鈞の経歴については『崇陵病案・序』などの資料によって補完することでき、ここで力鈞の全体像が見えてきたのである。特に彼は宮廷の御

<sup>27</sup> 『經籍訪古志』は、江戸時代の学者の森立之などが編纂した漢籍に関する目録学の著作。

<sup>28</sup> 黎庶昌(1837～1897)字は莚斎。貴州省の遵義の人。清の光緒帝の時に日本駐在公使として派遣され、積極的に外交活動を行った。『清史稿』(卷四四六)にその伝がある。

<sup>29</sup> すなわち『大廣益會玉篇』というものである。『大廣益會玉篇』が『四部叢刊初編』に収められている。

用医師に任じられたのであるから、その実力の程がうかがえるだろう。実は力鈞は宮廷に仕える前にも数々の実績をあげており、特に故郷の福建省にペストが流行した時には、漢方薬で治療を行い、多くの命を救ったことも伝えられているから、当時知られた名医だったと考えることができる。

ところが、力鈞は何らかの事情によって思ったように医療事業を展開することができず、本業とは関係のない造幣業や塩の販売を手掛けた。力鈞から友人への手紙(同前)に「江湖市井、俗不可耐。但願為方技中人、且不可得。此則朝夕所痛恨者。」(世間の低俗に耐えきれません。方技〔医者〕中の一人になろうとするだけの願いも叶えられません。これが朝夕私が残念に思っていることなのです)と、そのやるかたのない無念を語っている。その直接の原因はわからないが、彼ほどの名医が単に経済的な理由から医療から離れたとは考えにくく、先にも述べたように、何らかの政治的な事情も作用したのかも知れない。

力鈞の来日と山本憲の清国の旅は日中の民間交流の歴史においては小さな一齣でしかないが、その後、山本憲は梁啓超や羅振玉などの中国を代表する知識人たちと交友関係ができることとなった。また山本憲の私塾では中国人留学生を受け入れたこともあって、その交流関係はさらに深まる事になっていったのである。戦争直後という時代状況の中でも、日中間の相互信頼の芽は潰れておらず、そこからまた大きく枝葉が育っていったことを記して擲筆したい。